古英語の副詞的格の用法と

Time Position の特定可能性について：

～‘day’と‘night’の用例を中心に～

中西志門
京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC2
nakanishi.shimon.65r@st.kyoto-u.ac.jp

要旨：本論文は、古英語で名詞の格変化形が単独で副詞として機能するものを対象とし、それらが現代英語に見られる前置詞を伴わずに副詞的に機能する名詞(副詞的名詞) に関する理論的枠組みで説明することが可能なのかを調査する。古英語のような名詞に豊かな曲用体系を有する言語では、名詞の斜格が副詞的に用いられる。一方、所有格以外の格変化を持たない現代英語においても直示的修飾語を伴う名詞が副詞的に機能することが知られており、先行研究では文脈中で副詞的名詞が特定の時点を指しているかによって容認性が変わると指摘されている。本論文は古英詩おける副詞的格の用法を記述した後、time position を表す用例に関しては、特定可能性が関わっていた可能性を指摘する。

キーワード：副詞的格、古英語、Bare NP adverb、DP adverb、PP adverb、NP-based adverbials、time position、specificity

1. はじめに

古英語のように豊かな曲用体系を有する言語では、名詞の格変化形が前置詞を伴うことなく副詞的に機能することが知られている。古英語では 4 つの名詞格(主格、属格、与格、対格) のうち主格を除く全てが副詞的に機能し得た。そのため、例えば dæg という語が時を表す副詞類として機能する際には、属格 dæges、与格単数 dæge、対格単数 dæg、与格複数 dagum、対格複数 dagas が前置詞句以外であり得た事になる。しかし、どのような場合に副詞的格が用いられたのか、また競合しうる表現である前置詞句とはどのような機能的差異があったのかが十分に解明されているとは言えない。

一方、格変化を持たないものの、例 (1) のように現代英語にも類似する名詞の用法が存在する。このように前置詞を伴わない名詞が副詞的機能を果たすものは、先行研究で副詞的格、Bare NP/DP adverb(ial)s、DP adverb/PP adverb (Alqarni 2021)、NP-based adverbials (Haspelmath 1997) など多様な用語のもとで議論されてきた。

(1) a. John arrived [that moment/minute/hour/day/week/month/year].
b. John arrived [the previous April/March 12th/Sunday/the Tuesday that I saw Max].
c. i. John will arrive [sometime next week].
ii. John has been here [few times that I can recall].

(Larson 1985:596)

現代英語のこのような名詞の用法にはさまざまな制限があることが知られており、Kobayashi (1999) はそれらを Semantic Extension、Semantic Inclusion、Typological Restriction、Lexical Restriction に分類した。

Semantic Extension は主要部が直示的 next、last、this、that や数量詞 some、every に修飾されていなければならないことである (Kobayashi 1999: 354, cf. Quirk et al. 1985: 692)。しかし、常にそうであるわけでもなく、例えば the や a のような冠詞であっても We met the day of conference (cf. Quirk et al. 1985: 693) のように十分に意味のある修飾が行われる場合には認可されることも指摘されている (Kobayashi 1999: 371)。

Semantic Inclusion は、副詞的名詞によって表される前置詞の意味が限定的であることを指す (Kobayashi 1999: 356)。例えば Quirk et al. (1985: 693) は「point in time の表現で省略可能な前置詞は at、on、in に限られており、before や since は必須である」と述べている。古英語を対象とした Kniezsa (1986: 424) も「豊かな曲用体系を有する言語でも、副詞的格は基本的な副詞的関係を表すことしかできなかった」と同様の指摘を行なっている。

次に、Typological Restriction は副詞的名詞が表す意味が時、場所、経路、様態に限定されることであり、このうち時を表すものが最も大きなグループを形成する (Kobayashi 1999: 354, Larson 1985: 595)。

最後に、Lexical Restriction とは、どのような語彙が副詞的に用いられるかという点に関する制約である。時間を表す用例に限定すると、例 (1) に例示したように、時点、時間の期間を表す名詞 (日、月、年など) や暦 (1a)、特定の時間的期間を表す名詞 (1b)、time という名詞が主要部である名詞句 (1c) が副詞的に機能

することがわかる。しかし、同じカテゴリーの名詞であればすべてが副詞的に用いられるわけではなく、*day*, *place*, *way* などの一部の名詞だけがこのような力を持ち、たとえ意味的に類似している名詞でも *location* などは同様の力を持たない (Larson 1985: 602)。これに関して、Kobayashi (1999: 354) は (2) のような例を出し、war や childhood は単なる期間以上の意味を持つため、副詞的に機能しないとし、最も内容の薄い語である time が用いられると説明している[1]。

(2) *I saw her *that war*/*childhood*/*that occasion*.

上に見たような現代英語における副詞的名詞の用法と古英語における副詞的格の用法がどのような関係にあるのか、両者は同じ原理で説明することが可能なのかといった点は、これまでの研究では顧みられてこなかった。本論文の以降の節では古英語における当該現象を副詞的格、現代英語のものを副詞的名詞と呼び、副詞的名詞を説明する原理が古英語の副詞的格の使用原理としても通用するのか、また、両者に違いが存在するとしたらどのようなものがあるのかを考察する。

2. 先行研究

本節ではまず古英語における副詞的格を取り扱った記述的な先行研究を概観し、当該の現象に関する記述を整理する。また、それらの研究における問題点を指摘したのち、現代語における副詞的名詞句を対象とする研究において議論される理論的問題点を整理する。

2.1. 古英語の副詞的格に関する先行研究

古英語における副詞的格の用法に注目した先行研究は多いとはいえず、様々な副詞的格の用法が十分に解明されているとは言い切れない。特に、伝統文法では単に、格が副詞的に用いられるという記述とともに例が提示されているだけにとどまることが多い (Wülfing (1894) や Shipley (1919)、Rössiger (1885) など)。個別の格にのみ注目したものには、与格を扱った Callaway (1922) や Pasicki (1998)、対格と前置詞句の対比を扱った Yamakawa (1980) がある。機能的に競合すると考えられる前置詞句との関係を扱う先行研究には Kniezsa (1986、1991)、Sato (2009) などがあり、それぞれにおいて個別の格の意味への言及はなされている。

こうした先行研究は散文作品を取り扱うことが多いが、散文作品という性質上

[1] 同様の指摘は Barrie and Yoo (2017: 503) も行っている。

副詞的格の用法に制限があることが指摘できる。例えば上述の Sato (2009) は副詞的格の用法に対する前置詞句の増大を明らかにすることを目的として前期散文 3 作品、後期散文 3 作品、計 6 作品における副詞的格と前置詞句の割合を調査した。それらのうち、時点を表す副詞的格が最も多く確認された『年代記』A 写本では、時点を表す用例の大半 (66 例中 58 例) が *þy (ilcan) geare* 'the (same) year' という、『年代記』の性質上頻出する固定表現であった (ibid: 34)。

このように散文中に見られる副詞的格の用法が、語彙的にもバリエーションとしても貧弱である。それに対して韻文においては副詞的格がより頻繁に用いられていることが指摘されている (Sato 2009: 41)。しばしば指摘されているように韻文における韻律や詩的定型句 (Poetic Formula) などの影響もあり、散文と韻文では syntax が異なるとされているが[2]、副詞的格と前置詞句の違いを究明するには、散文よりもあえて韻文を調査する必要があるのではないかと考えられる。

2.2. 理論的先行研究

副詞的格を取り扱った理論的文献には生成文法、特に GB 理論などを中心としたものが多い。生成文法理論の格フィルターという概念によると、音形を持つ名詞句は格を持たなければならない[3]。そのため、主語や動詞の目的語の位置になく、また前置詞も伴わない名詞の存在は理論的に問題となり、それらが生起する原理を説明する試みがなされてきた。この問題に対するアプローチは主に二つに分かれ、一方は副詞的名詞を前置詞の発音されない前置詞句であるとし、他方は名詞句であるとする。

前者の考えには Bresnan and Grimmshaw (1978) の提唱した P-deletion rule のように、場所や時間を表す名詞の前では同じ意味特徴を持つ前置詞を削除することができる (ibid: 347) というものがある。Larson (1985) はこれを ad hoc であるとして退け、一部の名詞はその意味論的特性から素性[+F]を持ち、この素性はそのような N を持つすべての NP に受け継がれ、それがラベル付けする NP に斜格を付与する。一度格を付与されると、この NP はその inherent semantics に合う adjunct theta roll が自由に与えられるが、non thematic position では[+F]NP は普通の名詞として生起するため [+F]による格付与は optional になると主張した (ibid: 606-609)。

これに対して Barrie and Yoo (2017) は、Larson にしたがえば place という名詞

---

[2] Van Kemenade (1987: 4)
[3] 原口他 (2016: 77)

は[+F]なので*John lives that place.のような文は容認されるはずであるが、実際にはそうでないことから、このような名詞は inherent θ-roll を持つが、DP である場合には格も必要とすると主張し、John lives *(in) that place のような文の非文法性を説明すると同時に Mary has lived (in) many places における前置詞の任意性を動機づけられるとした (ibid: 499)。

以上のように、生成文法の枠組みでは副詞的名詞句がどのように認可されるかという点に主な関心が持たれ、その説明のために格付与や意味役割という観点からの説明が試みられていることがわかる。しかし、その大元には一部の名詞の意味的特徴が用法の可否を左右するという考えがいずれの文献にも通底していることが確認できる。

一方、生成文法以外のアプローチから副詞的名詞の生起条件を説明しようという試みもある。例えば、永井 (1986: 67f) は Larson の説明では次の問題点を説明できないとした。

1. 素性[+F]を持つとされた名詞句でも、副詞になりえない文脈が存在する。
2. 同じ内部構造を持った名詞句でも、文中の位置によって容認性に変化が出る。
3. 名詞句内に直示的な意味要素が含まれると副詞的名詞句になりやすいという事実が説明できない。
4. 1 日を単位として表す名詞句の方が副詞になりやすい。
5. since, until, by などの意味は取り込めない。

1 に関して (3a) は可能であるが (3b) は不可能である点を挙げている。2 に関しては (4a) のように文末では可能であるが、(4b) のように文頭に today が来ると容認性が下がると指摘している。また、3 に関しては (5a) に対しての (5b) のように this があると容認性が上がるとしている。4 に関しては (6a) に対する (6b)、(6c) に対する (6d) のような例を挙げている。

(3) a. The money was paid the following day.
b. *Fortunately, we went on a picnic a fine day

(4) a. Our electricity was cut off briefly today.
b. Today Mr. Uys says he is "pretty much it" when it comes to films in South Africa.

(5) a. We're determined we're going to meet the $50 billion minimum in/* ϕ fiscal

1986.

b. General Doe has been facing a possible cut off of some $90million in aid this fiscal year.

(6) a. Under the proposal adopted Thursday, . . .

b. In New York City, the average price of regular unleaded gasoline was $1.246 in/* ϕ December.

c. People don't work (on) New Year's Day.

d. Ironically, many people died of hunger in/* ϕ the International Rice Year in 1969.

(永井 1986: 67-68)

上の問題点に対して提案されたのが特定性の有無である (永井 1987, cf. Tani 2010)。例えば次の例 (7a) においては、実際に Mary が母親に花を送った特定の日を指しているのに対し、(7b) は「母の日」には一般にそのようなことが行われるという、不特定の時点を指すため容認性が異なるという。

(7) a. Mother's Day, Mary gave her mother a bunch of flowers.

b. *Mother's Day, girls give their mothers a bunch of flowers.

(永井 1987: 65)

ドイツ語の副詞的名詞について論じた藤井 (2017) も同様の指摘を行っており、同じ「クリスマス」を指す名詞であっても例文 (8a) のように特定のクリスマスではなく仮定の話として提示する際には前置詞が必須であるのに対し、(8b) のように特定のクリスマスのことを指す場合には前置詞がなくても良いとしている。

(8) a. Was mögen Sie *(an/ zu) Weihnachten?

what want.PRS you.NOM *(on/ to) Christmas(.DAT)

「(アンケートの文で) クリスマスの日には何がしたいですか？」

(藤井 2017: 370)

b. Wir waren Weihnachten zu Hause.

we were Christmas to house

「私たちはクリスマスに家にいました」

(https://www.dwds.de/wb/Weihnachten)

以上の議論をまとめると、現代英語における副詞的名詞が認可される基本的条件として、意味の薄い名詞であること、時間の期間を表す名詞であること、直示や数量表現などによって修飾されていること、などがあげられる。しかし、これらの表現が表す時間的意味にはいくつかの種類があり、Tani (2010: 39) は time position、time frequency、time duration を区別した。改めて (1) の例を見ると、(1a) と (1b) と (1c. i) は time position を、(1c. ii) の例は time frequency を表していることがわかる。

こうした表現のうち全てが特定可能性と関係しているわけではないことは、(1c. ii) の frequency の例が特定の時点を表していないことからもわかる。特定可能といえるのは藤井 (2017: 370) によると直示表現 (morgen「明日」や gestern「昨日」)、特定の行事 (Weihnachten「クリスマス」や Ostern「イースター」)、暦の中の特定の範囲を示す表現 (Ende Mai「5 月の終わり」) である。また、これらに加えて Tani (2010: 43) は正確な日付が表されていなくても、話者が心の中で特定の日付を想定していれば可能だとしている。こうしたものはすべて time position を表しているものであるため、特定可能性が関わっているのは time position であるといえる。

3. 分析

本節では先行研究で指摘されている現代英語に関する指摘が古英語にも当てはまるのか、また同様の理論的枠組みで説明が可能なのかを検討していく。そのために実際に古英詩中で用いられた副詞的格の意味と、その用法を分析し、時点を表す用法と文脈からの特定可能性に相関関係があるかを調べる。

3.1. 分析対象

1 節で述べた Typological Restriction に関する先行研究の記述から、最も多様な語彙が用いられる時間名詞を対象として、Dictionary of Old English Corpus (DOEC) を用いて時間を表す名詞の用例を収集し、それらが副詞類として用いられている用例を抽出した。語彙の選定に際しては、先行研究によって指摘されている暦や特定の時間的期間を表す名詞のほか、時を表す名詞を Thesaurus of Old English のような、古英語の語彙を意味分野ごとに分類したデータベースから抽出した。これらの名詞が副詞的に用いられている用例と、前置詞句で用いられている用例を比較することによって、先行研究で述べられていた基準が古英語にも当てはまるのか明らかにできると思われる。また、その際比較対象とする前置詞句は、Semantic Inclusion の基準に従って in ‘in’、on ‘on’、æt ‘at’、to ‘to’などに限定する

[4]。

まず、古英語においてどのような名詞が副詞的に機能しえたのかを確認する。1 節で述べたように、古英語では主格を除く名詞の曲用形が副詞的に機能しえた。しかし、全ての時間名詞が副詞的に用いられたわけでも、副詞的に用いられる名詞でも全ての格が副詞的に用いられたわけでもないことが次の表 1 からわかる。

表 1[5] 古英詩で副詞類として用いられる名詞 (複合語を含む)

	acc		dat/instr		gen	prep		+gen
	sg	pl	sg	pl		sg	pl	
dæg ‘day’	○	○	○	○	○[6]	○	○	○
niht ‘night’	○	○	○	○	○	○	○	○
tīd ‘time’	○			○	×	○		○
stund ‘time’	○		×	○	×	×		○
hwīl ‘space of time’	○		×	○	×	○		×
þrāg ‘time’	○		×	○	×	×		×
morgen ‘morning’	×		△		×	○		○
æfen ‘evening’	×		×	×	×	○		○
ūhta ‘dawn’	×		×		×	○		×
missere ‘half year’	×		×		×	×		○
sumor ‘summer’					△[7]			
winter ‘winter’					△			

どの格で副詞的に用いられるかは語彙によってかなりの違いがあり、*missere* は常に属格複数形で fela ‘many’のような不変化詞や数詞を修飾する形でしか用いられない一方、*ūhta* のように前置詞句でしか用いられないものもある。副詞的格で用いられる語彙でも対格と複数与格のみ可能というもの、それに加えて与格単数も

[4] これらの前置詞の意味領域は大きく重複するため (Lunskær-Nielsen 1993: 81)。
[5] 用例が在証される場合は○、在証されない場合は×で表した。△は用例が確認できるものの、一例しか確認できなかったもの。
[6] ただし、dæg 単体での使用は稀で、もっぱら dæges and nihtes という成句で用いられる。
[7] 古英詩からの用例は Ph.37a wintres and sumeres 一例のみだが、中英語 Lawman A 20988 や、古フリジア語 Old Frisian Reader p.155 (thes wintres and thes sumeres) にも例証されている。

可能というものもあったが、属格で用いられる語は非常に限定的であり[8]、副詞的対格、与格、属格、副詞的な数詞や代名詞を属格複数で修飾する用法 (+gen)、前置詞句の全てで用いられるのは dæg と niht の 2 語だけであることがわかった。

一方、意味や語源の面で対応する現代英語の語彙は副詞的に用いられるにもかかわらず、古英語では副詞的用法が確認されない名詞も見られた。æfen ‘evening’ や morgen ‘morning’は現代英語では指示詞 that などを伴い副詞的に使用できたが、古英語では morgen ‘morning’が『パリ詩篇 (PP.)』89.6,2 で副詞的与格として用いられているのを除いて全て前置詞句で用いられているほか、wicu ‘week’にも副詞的用法は見られなかった。先行研究ではイベントを表す名詞も副詞的に用いられるとされていたが、資料的制約からそのような名詞句が用いられている用例は多くなく[9]、mæsse ‘mass’も古英詩では副詞類としては機能していなかった。曜日などの暦上の単位となる名詞も用例が非常に限られており、sunnandæg ‘sunday’は古英詩全体から 2 例しか確認されず[10]、いずれも副詞的には機能していなかった。

したがって、Lexical Restriction に関しては、古英語では副詞的使用が可能となる名詞の語彙的制約に加えて、どの曲用形で用いることが可能かという制約も存在することになる。

次にそれぞれの表現がどのような意味を表していたのかを調べると、対格形は例外なく時間的継続を表しているため、本論文が調査対象とする time position を表す表現ではないことが確認できる。

(9) *Đā se ellen-gǣst | earfoðlīce || **þrāge** geþolode,| sē þe inþystrum*
then the bold-demon painfully time.ACC endured the which in darkness
bād, || þæt hē dōgora gehwam | drēam gehȳrde || hlūdne in healle;
waited that he days.GEN each.DAT delight heard loud in hall
「そして暗闇に待ち伏せる怪物は悲痛にも、日々広間の高らかな歓楽の声を聞くのを長きにわたって耐えた。」

(Beo. 87a)

---

[8] Traugott (1972: 78f) も dæg ‘day’の副詞的属格 dæges は可能であるのに monaþ ‘month’の副詞的属格 monþes は不可能であると指摘している。

[9] イースター Season. 55a ただし ofer 前置詞句, 五旬節 Season 60a, CEdg. 8a いずれも目的語

[10] sunnandæg は散文的であると指摘されており (Hilton 2014: 117)、韻文での例は Season. 57 と Glo I.25 のみ。

(10) *forðām secgum wearð,* || *ylda bearnum,* | *undyrne cūð,* ||
therefore men.DAT became people.GEN children.DAT openly known
gyddum geōmore,| *þætte Grendel wan.* || ***hwīle*** *wið Hrōþgār*
tales sadly that Grendel contended while against Hrōþgār |
hete-nīðas wæg
enmity carried
「それゆえ悲しいことに語り草によってグレンデルが長きに渡ってフロースガールと争っていることが人の子の間には知れ渡った」

(Beo. 153a)

そのため、本論文での対象となるのはもっぱら属格と与格の用法に限定される。また、Lexical Restriction を考慮すると dæg と niht の二語が最も広範に使用されているため[11]、以降の分析では主にこの二語を対象として分析する。

3.2. 特定可能性をもとにした分析

次に副詞的与格と属格によって表されている時点が、特定可能であるのかという点を考察する。

特定可能の基準には先行研究で挙げられていた直示表現、指示詞を用いた表現、特定の行事を表す表現、話者の頭の中に特定の時間が想起されているかといった特徴の有無を用いる。以降ではこの副詞的格がこの基準を満たしていれば特定可能であるとみなす。

まず、前節で見た全ての表現で使用可能な語彙である dæg と niht がどのように用いられるのかを下に示す。

[11] ポーランド語での四季を表す名詞の副詞類としての用法に関する制約については Bacz (2013) がある。

表 2 DOEC において副詞類として扱われる niht の曲用形

	Prep.	Adj.	Pref.		
1			(sin)	nihtes	gen
2a			sin/gystran	niht(e)	dat[12]
2b	on/in/æt	wanre/sweartre/middre/anre etc.		niht(e)	dat.sg
3a			middel	nihtum	
3b		deorcum/sweartum/wonnum /hadrum/seofon/middum		nihtum	dat.pl
4		ondlonge/seofon		niht	acc

表 3 DOEC において副詞類として扱われる dæg の曲用形

	Prep.	Dem.	Adj.	Pref.		
1					dæges	gen
2				heo/gystran	dæg(e)	?[13]
3b			ælce/æghwilce			
3c	(on)	þy	ilcan/sylfan/序数詞		dæge	dat/instr.sg
3d	on	ðam	(eadgan/ylcan)			
4a	(on)			(X)		
4b	on	ðam			dagum	dat.pl
4c	on	þissum		(wyn)		
5a			ondlangne/ealne		dæg	acc sg
5b				lif	dagas	pl

[12] sinnihte に関して、ここでは Doane (1978: 388) や Heyne (1961: 191) に従い与格としたが、Beo. 161b の用例について Fulk et al. (2008: 434) は対格単数、Sedgefield (1913: 229) は対格複数とするなど、意見の対立が見られる。この語は子音幹女性名詞である *niht* に強調を表す *sin-*が付加されて形成されているため、同様に子音幹名詞だと見なす場合には、*sinnihte* という語形は与格であると考えることができる。しかし、Heyne (1961: 192) によると、古英語と近縁な関係にある古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』において *suart sinnahti* 'dark eternal-night' (2146a) という語形が現れていることから、これが ja-幹名詞の対格単数である可能性も指摘されているという。

[13] タイプ 2 は通常、単に副詞として扱われるが、語形成としては副詞的名詞が起源になっていることは明らかである。また、heodæg は古ザクセン語から翻訳されたとされている『創世記 B』にのみ在証される。

直示的表現である today、yesterday、tomorrow のうち、today と tomorrow は古英語においてはそもそも to dæge, to morgen という前置詞句である。それに対して gystran という要素が dæg や niht を修飾することにより yesterday や yesterday night を表したため、こちらは前置詞を伴わない形で現れる。

(11) *Hēo þā fǣhðe wræc* || *þē* *þū* ***gystran niht*** | *Grendel cwealdest*
she then enmity avenged which you yesterday night Grendel killed
þurh hǣstne hād | *heardum clammum,*
through violent manner hard.DAT.PL grasp.DAT.PL
「彼女 (グレンデルの母) はあなたが強き握力をもって乱雑にグレンデルを殺したことに復讐したのです」
(Beo. 1334a)

例 (11) では前日の晩にベオウルフが怪物グレンデルを倒したことに対し、その母親が復讐を果たしたことが語られる場面であるため、この表現によって表される時点は特定可能であるといえる。

(12) *þu* ***to dæge þissum*** || *ademest me fram duguðe* | *and adrifest from*
you to day this deprive me from prosperity and drive-out from
eared minum.
abode my
「あなたは今日、私から繁栄を奪い、そして私を住処から追い出すのです。」
(GenA. 1031b)

(12) は『創世記 A』においてカインが兄弟殺しのために追放されることに対して、神に返す言葉である。ここではラテン語 hodiē ‘today’の翻訳として to dæge þissum という直示的指示詞を用いた前置詞句が用いられている。指示代名詞で修飾することができるという事実からも、古英語における today はいまだに十分に語彙化していないと言うことができる (cf. Brinton and Traugott 2005: 63)。

3.2.1. 指示詞付き表現

まず dæg が指示詞とともに用いられている例を見る。古英語においては現代英語に見られるような定冠詞は未だ発達していなかったものの、指示詞の存在により特定の時間を指していると考えることができる。

指示詞 se (男性単数主格) の具格である þy が用いられている用例は全体で 10 例確認され、うち 5 例が一年の暦を重要な祝日とともに詩の形で語る『メノロギウム』 (Men.) という詩に見られた。þy を用いた用例には þy ilcan ‘the same’/þy sylfan ‘same’/þy + 序数詞 + dæge というパターンが見られ、þy ilcan の場合 on は付かないのに対し、þy sylfan ‘the same’は on がある場合とない場合が見られた[14]。類似した表現として指示詞が与格で用いられる þam ilcan も (13b) のものが一例見られたが、この場合には前置詞が用いられている。これら全ての用例ではすでに述べられた日付を前方照応的に指し、その日が特定の祝日であることが示されている。

(13) a. And **þy ylcan dæge** | ealra we healdað || sancta symbel |
and the.INSTR same day all.GEN we hold saints’ feast
þara þe sið oðde ær || worhtanin worulde | willan
the.GEN.PL which afterwards or earlier worked in world will
drihtnes.
Lord’s
「そしてその同じ日に諸聖人の日があるが、彼らはかつて主の意志を世界に行なったもの達である。」

(Men. 199-201)

b. *Crist wæs acennyd,* | *cyninga wuldor,* || *on midne winter,* |
Christ was born kings.GEN glory on middle.ACC winter
mære þeoden, ece ælmihtig, | ***on þy eahteoðan dæg*** ||
famous prince eternal almighty on the.INSTR eighth day
Hælend gehaten, | *heofonrices weard.* || *Swa þa sylfan tiid* | *side*
Savior named heavenly-kingdom’s ward as the same time wide
herigeas, || *folc unmæte,* | *habbað foreweard gear,* || *for þy*
multitude folk uncountable have beginning-of year for the.INSTR
kalend us | *cymeð geþincged* || ***on þam ylcan dæge*** | *us to tune,* ||
calendar us comes determined on the same day us to town
forma monað; | *hine se folc mycel* || *Ianuarius* | *gerum heton.*
first month him.ACC the folk great Janurary formerly called

[14] Chr. 1153b では副詞的に、Men. 47a では on 前置詞句が用いられている。

「キリストは生まれた、王達の栄光は冬の真っ只中 (クリスマス／クリスマスイブ[15]) に。名高き主は、永遠の万能者は、その 8 日目に救世主と名付けられた、天上の守り主は。その同じ時に広き群衆は、無数の人々は新年を迎える。何故ならば暦は我々に来ることを定めているからだ、その同じ日に我々の町に最初の月が。それを偉大な民 (ローマ人) は 1 月と古に呼んだ。」

(Men. 1-10)

c. *Swylce Benedictus || embe nigon niht þæs | nergendsohte, ||*
likewise Benedictus after nine nights afterwards Savior sought
heard and higestrang, |þæne heriað wel || in gewritum wise,
hard and brave then praise well in books.DAT learned
|wealdendes þeow || rincas regolfæste. | Swylce eac
Ruler's servant men adhering-to-monastic-rules likewise also
rimcræftige on þa ylcan tiid | emniht healdað, || forðan
skilled-in-reckoning on the same time equinox hold because
wealdend god |worhte æt frymðe **|| *on þy sylfan dæge*** *| sunnan and monan.*
Ruler God worked at beginningon thesame day sun and moon

「同様にベネディクトゥスは 9 日後に救世主を求めた、激しく勇敢な者は。そして人々はよく讃える、書物に習熟した者達は、主の僕は (修道規則に) 厳格な者たちは。また同様に数を数えるのに優れた者たちは同じ時に、春分を迎える。何故なら主たる神が初めに、その同じ日に太陽と月を作られたからだ。」

(Men. 40-47)

(13a) では直前の文脈で 11 月の到来が語られており、11 月が到来するその同じ日に (þy ylcan dæge) 万聖節 (11 月 1 日) が祝われることが述べられていることから、特定性があるといえる。一方、(13b)では on þam ylcan dæge が on midne winter におけるイエスの誕生から 8 日目 (on þy eahteoðan dæg) と同じ日に位置付けられる 1 月の始まる日を指しており、同様に特定可能といえるが、こちらは前置詞

[15] ユリウス暦ではクリスマスは冬至と一致するため midwinter, middewinter, middanwinter, middewintres mæssedæg, middes wintres mæssedæg などと呼ばれた。しかし、この詩での通常の数え方では 1 月 1 日は「7 日目」に当たるはずであるため、ここではクリスマスイブを指しているとも考えられる。 (Karasawa 2015:86-87)

句である。(13c) でも on þy sylfan dæge は 3 月 21 日の春分を指しているため、これも特定の日付を指しているといえる。

一方、「þy + 序数詞 + dæge」は、「～日目に」を表す表現で、それ以前の文脈には対応する表現がない点が、þy ilcan などと異なる。(13b) の例のように何らかの時点を起点として日付を数える際に用いられている。この表現で前置詞句とともに用いられているのは (13b) のみで、他の例ではすべて副詞的に用いられていた。

(14) *Þær wæs blis micel* || ***on þam eadgan dæge*** | *eallum geworden,* ||
therewas blissgreat on the joyous day all.DAT.PL happen
þone niða bearn | *nemnað and cigað* || *Pentecostenes dæg.*
the.ACC men.GENchild name and call Pentecost.GEN day
「人の子が五旬節と呼ぶ、その喜ばしい日には皆に大いなる喜びがあった。」
(CEdg. 6a)

(14) on þam eadgan dæge はエドガー王が戴冠した日の記述としてまず指示詞とともに用いられ、その後 þone 以下の関係節によってその日が「人々が Pentecostenes dæg (五旬節) と呼ぶ日」であることが補われている。そのため、この文脈でも指示詞を伴う句は特定の時を表しているといえる。また、この際にも韻律的に$\overset{x}{\text{on}}$ $\overset{x}{\text{þam}}$ $\overset{/}{\text{eadg}}$an $\overset{x}{\text{dæ}}$ge$\overset{/}{\text{}}$$\overset{\smile x}{\text{}}$となり、X / X /という B 型の韻律を示しているが、一つ目の drop が二音節であることからも前置詞 on の存在は韻律的に必要なわけではないといえる。monaþ ‘month’や wucu ‘week’は同様の構文で用いられており、全て前置詞句であった。

以上のように、指示代名詞とともに用いられる dæg の曲用形は特定の時点を表していると考えられることがわかった。その際、þy ilcan/sylfan、þam ilcan は前方照応的かつ前置詞と共起する割合は þy ilcan > þy sylfan > þam ilcan であった。前置詞句で用いられる場合とそうでない場合があることは、両者の競合関係を示唆しているとは考えられるが、すべての副詞的用例は特定の時点を指していることから、特定性があるその容認性と関わっている可能性を指摘できる。

3.2.2. 指示詞を伴わない表現

前節で指示詞を伴う副詞的格は特定性を持つことが確認できた。一方、本小節で扱う指示詞を伴わない副詞的名詞には「かつて」のような意味を表す詩的定型句 (Poetic formula) [16] だと指摘されている (on) X-dagum や nihtum のような複数

[16] Magoun (1953: 450)。

与格形や属格形 nihtes があり、これらの用例には time position を表すものと time frequency を表すものの両方が含まれる。

(on) X-dagum は時を表す副詞類として Beo.や And.の冒頭で用いられ、58 例例証されており、そのうち 9 例が前置詞を伴わずに副詞的に用いられており、その動作が大昔に行われたことを表している。

(15) a. *swā hine **fyrn-dagum** || worhte wǣpna smið, | wundrum*
so him far-days.DAT made weapons.GEN smith wonders.DAT
teode, besette swinlicum, | þæt hine syðþan no
made embellished boar-figures that him.ACC since never
brond ne beadomecas | bitan ne meahton.
sword nor battle-sword cut not could
「(その兜は) 古の日に武器職人が奇跡によって作り出し、猪の型で飾って以来いかなる剣も切ることはできなかった.」

(Beo. 1451b)

b. *þone on **geār-dagum** | 'Grendel'nemdon*
the on days-of-yore.DAT Grendel named.3PL
「彼を人々は古の日にグレンデルと名付けた」

(Beo. 1354a)

c. *"Ic þæt gearolice | ongiten hæbbe || þurg witgena |*
I that clearly perceived have through prophets'
*wordgeryno on godes bocum | þæt ge **geardagum** || wyrðe wæron |*
a-deep-saying on God's books that you old-days.DAT dear were
wuldorcyninge,"
king-of-glory
「私はそれをはっきりと知りました、神の書物で預言者の言葉の秘密を通じて、あなた方が古の日々に栄光ある王にとって価値のある方々だったことを」

(El. 290b)

このような例では多くの場合どれほど昔のことであるのか、具体的にどの時代のことであるのかなどは語られていない。しかし、(14a) では特定の兜の制作された時点に関する言及であり、(14c) における過去の状況を単に述べるものとは

用法が異なっている。つまり、副詞的に用いられている用例を細かく確認すると比較的特定性の高い時点を表すものと時点を表さないものに分かれるのではないかと考えられる。

一方、単純語の dagum は副詞的用法が 2 例[17]のみ、前置詞句を含めても 15 例と限定的であった。前置詞とともに用いられている例においても dagum は「時代」や「日々」という意味を表しており特定の時点を表しているとは考えにくいと思われる。

nihtes は過去における習慣や反復的動作を表しており、その中には特定性の高いものと、単に時間帯を表しているものが見られた。nihtes はほとんどの場合修飾要素を伴わずに用いられ、oft 'often'や symble 'always'という副詞で言い表された習慣的動作を表したり (Guth. 1210a, Jud. 45a)、on morgene 'in the morning'や on dæge 'on day'のような表現と対比的に用いられて (PP.91.2,3b, Rim.44b)、時間帯を表している。一方で、中には習慣的ではなく単に時間帯を指す文脈でも用いられる用例も確認された。

(16) a. *Com* ***nihtes*** *self,* || *þær se waldend læg* | *wine druncen.*
came night.GEN himself where the ruler lies wine.DAT drunk.PP
「(神は) 主人 (アビメレク) がワインに溺れて横たわっているところへ夜自ら来た。」

(GenA. 2634b)

b. *þǣr ic fīfe geband,* || *ȳðde eotena cyn* | *ond on ȳðum slōg*
there I five bound destroyed giants' kin and on waves stroke
|| *niceras* ***nihtes****.*
water-demons night.GEN
「そこで私は五人を縛り上げ、巨人族を平定し、夜には波の上にて海獣を誅戮した」

(Beo. 422a)

c. *Ne mot on dæg restan,* || ***neahtes*** *neðyð,* | *cræfte tyð,* || *cristnað and*

[17] PP.82,8 と Res.31a。後者に関しては絶対与格であるとする説もある (Callaway 1889: 332)。

not can on day rest night.GEN venture power pull baptize and
clænsað cwicra manigo, || *wuldre gewlitigað.*
cleanse living.GEN many glory beautify
「(川の水は) 昼に休むことは叶わず、夜には果敢に進み, 力によって引きずり、命あるものの多くに洗礼し、清め、栄光によって美しくする。」

(Sol. 396a)

例文 (16a) では、神がゲラル王アビメレクを訪れた場面が語られており、文脈上は特定の時点におきた一回的動作を指していると考えられる。同様に、(16b) はベオウルフが過去に自らの行った事績を語る場面で、海獣を倒したのは慣習的に行われていたわけではないため時間帯を表していると考えられる。この用例ではベオウルフはこれが具体的にいつの出来事であるのかを語っていないが、彼の頭には特定の時間が想起されていると考えられるため、特定性があると考えられる (Tani 2010: 43)。

一方、(16c) では on dæg との対比から nihtes (neahtes) は単に時間帯を表しており、水の流れに関する一般的論が述べられている。そのため、このような例では nihtes は時点ではなく反復や習慣を表す frequency 表現であるといえる。

このように副詞的属格は時間帯を表す際に用いられ、nihtes に加えて強意の接頭辞 sin-が用いられる例も確認された。一方、dæges は nihtes と異なり単体で用いられることは少なく、dæges ond nihtes という成句で用いられることがほとんどであった。また、niht も修飾要素が付く場合には副詞的属格よりも前置詞句で用いられる。

それに対して nihtum は (18) のように常に何らかの形容詞や middel- 'middle' のような前綴り付きの複合語として用いられており反復的動作を表しているため、本論文の対象とは異なるといえる。

(17) *Heorot eardode, sinc-fāge sel* | *sweartum* ***nihtum;***
Heorot dwelled ornamented hall dark nights.DAT
「(グレンデルは) 暗い夜毎にヘオロットの飾り立てられた広間に住んだ」

(Beo. 166b)

複数与格における dæg と niht の使用傾向には前者が基本的に複合語、かつ前置詞句で用いられるのに対し、後者が単純語、副詞的格で用いられるという違いが見られるが、中西 (2021) はこの 2 語の音節構造の違いに起因する韻律的制約が

その用法に関係していることを指摘した。しかし、今回の特定可能性からの調査を考慮に入れると、それに加えて両者の違いには意味的なものもあるのではないかと考えることができる。つまり nihtum は反復的動作を表しているため特定性の有無にかかわらず副詞的に用いられる time frequency 的用法であるのに対し、dagum には時点を表すものと反復、過去における習慣を表すものの両方がある。時点を表す場合には特定性がその容認に関わってくるために、前置詞を使う傾向が見られるのではないかと考えられる。

ælce dæge と æghwylce dæge はボエティウス著『哲学の慰め』の韻文訳にそれぞれ 2 例しかみられず、そのうち 3 例は散文版の ælce dæg に対応していた[18]。散文において ælce dæg であったものが æghwylce dæge に書き換えられたのは、ælce dæg (e) では半行を構成するには短すぎるからではないかと考えられる。例文 (19) のようにこの表現は frequency を表しており、特定の時点を指すものではないため本論文が対象とする現象とは異なるものであるといえる。

(18) *Hwa is on eorðan | nu unlærdra ||þe ne wundrige |wolcna*
what is on earth now unlearnd which not wonder heavens.GEN
færeldes, || rodres swifto, | ryne tunglo, || hu hy ***ælce dæge***
journey.GEN sky.GEN swiftness orbit stars.GEN how they each day
| utan ymbhwerfeð || eallne middangeard?
outside go-around all.ACC world
「今やこの地球に、雲の流れや空の敏捷さ、日々外で世界の周りを星が回っていることに驚かないような無学なものがいるだろうか」

(Met. 28, 4a)

4. まとめ―現代語における副詞的名詞との差異

以上の 3 節では、古英詩で time position を表している副詞的名詞を対象として、文脈からの現代英語を対象とした先行研究で指摘された特定可能という条件がその使用と関わっているかを調査し、古英詩における time position を表す副詞的名詞の容認性とも部分的に関わっていることを明らかにした。

時点を表す副詞的格のうち、具格指示詞 þy＋形容詞 ilcan ‘same’に修飾されたものは全ての用例で特定の時点を表していた。また、属格単数形 nihtes や dæg の

[18] 韻文版はラテン語からの翻訳である散文版を元に作成された (唐澤 2004: 231)。

複数与格形には文脈中から一回的な動作の行われる時点を表しているものと、習慣を表しているものがあり、前者の場合には表されている動作の時点が特定である、あるいは話者の頭の中に特定の時点が想起されていると判断できるものであった。

このように現代語の time position を表す副詞的名詞の認可条件である特定可能性が古英語の time position を表す副詞的格にも当てはまる場合がある一方、現代英語では副詞的名詞が用いられる文脈でも副詞的格が用いられない例も多々見られた。例えば、現代英語に見られる evening や morning などの名詞が直示的指示詞に修飾される that morning のようなものは古英詩には確認されなかった。したがって、古英語における副詞的格と前置詞句の分布は、現代英語とは異なる様相を呈していたといえる。一般的には格変化形を用いる用法からより前置詞を用いるという傾向があると言われるが、実際には古英語期にはあまり一般的でなかった副詞的名詞の用法が現在ではより定着しているということになる。

また、Lexical Restriction に関しても、現代英語で副詞的に用いられる語の副詞的用法が見られない、あるいは非常に限定的であることも確認された。つまり、副詞的に用いられるか否か、また、どの格で用いられるかという点について語彙的差異が大きかったといえる。

5. 課題と今後の展望

今回の調査では対象を韻文における time position を表す用例に限定して、特定可能性の有無との関連を調べたため、今回の結果は古英語における副詞的格の用法を完全に説明するものとはいえない。特に、time frequency や time duration を表すものに関しては扱わなかったため、これらの例に関しては別の説明原理が必要になってくる。今後の研究では、古英語全体の傾向を調べるため、散文も含めたデータを調査し、より全体的傾向を明らかにする必要がある。

また、現代英語と古英語の間で特に大きな違いを示していたのは、直示表現 today、tomorrow であろう。これらは現代英語では前置詞を取らない名詞として例示されることもあるが[19]、古英語ではそもそも前置詞句である。副詞的格が次第に固定化してそれ自体が副詞となったものには hwilum のように後代に whilom という副詞として固定化したものもあり、このように名詞から副詞へと変化する現象は文法化や語彙化という通時的変化と関わってくるのではないかと思われる。したがって、副詞的格の研究を進めることによってこれらの分野への新たな知見

[19] cf. Quirk et al. (1985: 692)

を得られるのではないかと思われる。

副詞的格の通時的変化には、語彙化以外のものも見られる。古英詩での時を表す副詞的属格には語彙的制限が大きいことをすでに見たが、古英語末期から中英語にかけて副詞的属格が増大したという指摘もある (Jespersen 1954/1961: 303)。これに関しては末期古英語から中英語最初期に当たる言語記録が残されている『年代記』E 写本 second continuation でも副詞的な属格が限定的で、固定的な表現に限られているという主張もあるため (Allen 2007: 87)、今後詳しく調べていく必要がある。副詞的名詞にまつわる通時的変化をより詳らかにするには、that や last がつくと副詞的用法が可能になるのはいつ頃からなのか、またドイツ語では morgen は副詞として扱われるのに対し、英語では古英語の段階から前置詞句が圧倒的に優勢であったことにどのような理由があったのか、などを今後調べる必要があるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21J11676 の助成を受けたものです。

省略記号

And.	=	Andreas『アンドレアス』
Beo.	=	Beowulf『ベオウルフ』
CEdg.	=	Coronation of Edgar『エドガー王の戴冠』
Chr.	=	Christ『キリスト』
El.	=	Elene『エレーネ』
Gen A.	=	Genesis A『創世記 A』
Glo I.	=	Gloria I『グローリア I』
Guth.	=	Guthlac『グースラーク』
Jud.	=	Judith『ユーディト』
Men.	=	Menologium『メノロギウム』
Met.	=	Metre of Boethius 韻文版ボエティウス著『哲学の慰め』
Ph.	=	Phoenix『不死鳥』
PP.	=	Paris Psalter『パリ詩篇』
Res.	=	Resignation『諦観』
Rim.	=	Riming Poem『脚韻詩』
Sol.	=	Solomon and Saturn『ソロモンとサタン』

一次資料

Dictionary of Old English Web Corpus, compiled by Antonette diPaolo Healey with John Price Wilkin and Xin Xiang. Toronto: Dictionary of Old English Project 2009.

Doane, Alger N. 1978. *Genesis A: A new edition*. University of Wisconsin Press.

Dobbie, van Kirk, Elliott. (ed.) 1942. *The Anglo-Saxon Minor Poems* (Vol. 6). Columbia University Press.

Karasawa, Kazutomo. (ed.) 2015. *The Old English Metrical Calendar (Menologium)*. Boydell and Brewer.

Muir, Bernard J. (ed.) 1994. *The Exeter Anthology of Old English poetry: Text* (Vol.1). University of Exeter Press.

A Thesaurus of Old English. 2017. Glasgow: University of Glasgow. http://oldenglishthesaurus.arts.gla.ac.uk/ (最終閲 覧:2020/8/30)

Wrenn, Charles L. (ed.) 1973. *Beowulf: with the Finnesburg Fragment*. fully revised by W.F. Bolton. London: Harrap.

参考文献

Allen, Cynthia. 2007. The Case of the Genitive in the Peterborough Continuations. In Alexander, Bergs, and Janne Skaffari (eds.) *The Language of the Peterborough Chronicle*, 77-92. Peter Lang Publishing Group.

Alqarni, Muteb. 2021. The Syntax of PP-adverbs within English Determiner Phrases. *English Language and Linguistics* 25(2): 325-345.

Altshuler, Daniel. 2014. Discourse Transparency and the Meaning of Temporal Locating Adverbs. *Natural Language Semantics* 22(1): 55-88.

Behaghel, Otto. 1923. *Deutsche Syntax: Eine geschichtliche Darstellung: Die Wortklassen und Wortformen: A. Nomen und Pronomen. Vol.1*. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.

Bacz, Barbara. 2013. The Four Seasons and the Accusative-locative Opposition in Polish. *Linguistica Atlantica* 19: 21-27.

Barrie, Michael, and Yoo Isaiah W. 2017. Bare Nominal Adjuncts. *Linguistic Inquiry* 48(3): 499-512.

Brinton, Laurel J., and Elizabeth C. Traugott 2005. *Lexicalization and Language Change*. Cambridge University Press.

Callaway, Morgan. 1889. The Absolute Participle in Anglo-Saxon. *The American Journal of Philology* 10(3): 316-345.

Callaway, Morgan. 1922. The Dative of Time How Long in Old English. In *Modern Language Notes* 7(3): 129-141.

Fulk, Robert D., Bjork Robert E., and Niles John D. (eds.), 2008. *Klaeber's Beowulf. (4th ed.)*. Toronto: University of Toronto Press.

Heyne, Moritz. 1961. *Beowulf. Vol. 3. Glossar (17th edition)*. München/Paderborn/Wien: Verlag Ferdinand Schöningh.

Jespersen, Otto. 1956/1961. *A Modern English Grammar on Historical Principles: Volume 6. Morphology*. London: George Allen and Unwin Ltd.

Kniezsa, Veronika. 1986. Temporal Relationships from Old English to Early Middle English. In Dieter, Kastovsky and Aleksander Szwedek (eds.), *Linguistics across Historical and Geographical Boundaries. Vol1: Linguistic Theory and Historical Linguistics*, 423-436. Berlin: Mouton De Gruyter.

Kniezsa, Veronika. 1991. Prepositional Phrases Expressing Adverbs of Time from Late Old English to Early Middle English. In D. Kastovsky (ed.), *Historical English syntax,* 221-231. Berlin: Mouton De Gruyter.

Kobayashi, Keiichiro. 1999. Another Approach to Bare-NP Adverbials as Nominals. *English Linguistics 16*(2): 353-380.

Larson, Richard K. 1985. Bare-NP Adverbs. *Linguistic inquiry* 16(4): 595-621.

Lundskær-Nielsen, Tom. 2012. *Prepositions in Old and Middle English*. Amsterdam: John Benjamin.

Magoun Jr, Francis P. 1953. Oral-formulaic Character of Anglo-Saxon Narrative Poetry. *Speculum* 28.3: 446-467.

Pasicki, Adam. 1998. Meanings of the Dative Case in Old English. In Van Langendonck, Willy., and William Van Belle (eds.), *The Dative: Volume2: Theoretical and Contrastive Studies*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Quirk, Randolf, and David Crystal. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Rössiger, Richard. 1885. *Über den syntaktischen Gebrauch des Genitivs in Cynewulfs* Crist, Elene *und* Juliana. Inaugural Dissertation zur philosophischen Doctorwürde. Halle (Saal).

Sato, Kiriko. 2009. *The development from Case-Forms to Prepositional Constructions in Old English Prose*. Bern: Peter Lang.

Sedgefield, Walter J. (ed.) 1913. *Beowulf Edited, with Introduction, Bibliography, Note, Glossary, and Appendices (2nd edition)*. Manchester: Manchester University

Press.

Tani, Mitsuo. 2010. Three Semantic Facets of Temporal Adverbial NPs in English. *The Bulletin of the Faculty of Education, Utsunomiya University. Section 1* (60): 39-46.

Traugott, Elizabeth C. 1972. *A History of English Syntax: A Transformational Approach to the History of English Sentence Structure.* New York and London: Holt, Rinehart and Winston.

Yamakawa, Kikuo. 1980. The Adverbial Accusative of Duration and its Prepositional Equivalent Part I. Old and Middle English. *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 21(1): 1-39.

Van Kemenade, Ans. 1987. *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Wülfing, J. Ernst. 1894. *Die Syntax in den Werken Alfreds des Grossen*. T. 1. Bonn: P. Hansteins Verlag.

永井智貴. 1986.「時を表す副詞的名詞句 (1)」『英語教育』35: 67-69.

永井智貴. 1987.「時を表す副詞的名詞句 (2)」『英語教育』36: 64-66.

中西志門. 2021.「古英語詩『ベオウルフ』と『創世記 A』における ‘day’ と ‘night’ の副詞的用法と前置詞句の対立～その語彙的傾向～」『人間・環境学』30: 113-123.

原口庄輔・中村捷・金子義明. 2016. 『増補版チョムスキー理論辞典』. 東京: 研究社.

藤井俊吾. 2017.「ドイツ語の Bare-NP Adverbs についての覚書: 前置詞 bis の分析を通して」.『東京大学言語学論集』38: 363-373.

Specificity in the context and acceptability of adverbial nouns in Old English: A particular focus on the use of *dæg* 'day' and *niht* 'night'

Shimon Nakanishi

In Old English, nouns with oblique case-forms were used as adverbs. Modern English has lost explicit inflectional case-forms except for genitives, but nouns with deictic modifications such as *that moment* are used as adverbs. This paper discusses whether case-forms functioning as adverbs in Old English can be explained by the same theoretical device that accounts for the acceptability of adverbial nouns in Modern English. Previous studies on adverbial nouns in Modern English indicate that their acceptability depends on temporal specificity in context. Drawing attention to instances of the adverbial case found in Old English poetry, this paper first outlines its usage, and then argues for the possibility that specificity was also significant in cases where nouns with adverbial case-forms referred to certain time positions.